HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	訪日旅行者接遇のための英語教育の研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	渡辺, 幸倫
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16327号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95263
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	WATANABE_Yukinori_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：渡辺 幸倫

主査　教授　　パイチャゼ　スヴェトラナ

審査委員　副査 特任教授　河合靖
副査 講師　石見禎
副査 教授 北星学園大学　森越京子

学位論文題名

訪日旅行者接遇のための英語教育の研究

本研究は、訪日観光客の接遇を目的とした観光英語教育（ESP: English for Specific Purposes）の現状と課題を分析し、観光現場に即した実践的な英語教育の改善策を考察する応用言語学研究である。2024年の訪日旅行者数はコロナ禍前を超えると予測されており、近年では個人旅行者やリピーターの増加に伴い、訪日旅行者の旅行スタイルが一層多様化している。訪日旅行者の多くは中国、韓国、台湾、香港などの非英語圏出身者であり、そのため観光現場におけるコミュニケーションでは、英語を母語としない者同士が共通語として用いるELF（English as a Lingua Franca）によるやり取りが広く行われている。しかし、日本の観光英語教育は依然として英語母語話者を規範とする教授法が主流であり、多様な英語使用に対応できる能力が十分に育成されていないのが現状である。日本政府観光局（JNTO）の調査においても、訪日旅行者から「スタッフとのコミュニケーション（英語が通じない等）」が課題として指摘されている。

本研究は以下の点において、審査委員から高く評価された。

第一に、近年急速に発展している観光産業、特にインバウンド観光と英語教育に関するテーマを扱っており、日本社会にとって極めて重要な課題を提示している点である。本研究テーマはその重要性が認識されつつも、包括的な研究が十分に進んでいない分野であ

り、本論文は独創的かつ研究価値が高いと評価された。また、観光と言語という異なる学問領域を結び付け、新たな視点を提供する点において、学術的独創性が際立っている博士論文である。

第二に、本研究では、テキストやシラバスの調査、大学教員への聞き取りを通じて大学における観光英語教育の実態を把握するとともに、観光案内所における聞き取り調査や観察を実施し、多角的な視点から考察を行っている点が特筆される。さらに、調査が困難とされる旅行者の視点をVideo Stimulated Recall Interviewの手法を用いて分析した点も高く評価された。これらの調査は適切な研究方法に基づき実施されており、分析・考察の精度が高く、理論的枠組み（WE、EIL、EFL）の整理も明確であり、論文全体の理解を助けるものとなっている。

一方で、口頭試問においては、以下の点について審査委員から指摘がなされた。

1.観光ESP教育への示唆の範囲

本研究では主に高等教育機関における観光英語教育に焦点を当てているが、観光ホスピタリティ産業全体への示唆も加えることで、学術的貢献にとどまらず、産業界への貢献がより明確になる可能性がある。観光分野においては、産業界への具体的な提言も重要な要素であると考えられる。

2.Small Talk の位置づけと教育的応用

本研究では、観光案内所でのコミュニケーションにおいてSmall Talkが特別なつながりを生む重要なスキルとして位置づけられている。しかし、その定義や理論的枠組みとの関連をより明確に示すことが求められる。また、このスキルを教育現場でどのように指導し、学習者に習得させるのかについて、具体的な教授法やシミュレーション手法の提示が必要である。

3.質的分析の深化

質的分析において、やや一般的なまとめにとどまっている印象があり、理論的枠組みやコミュニケーション研究の先行研究をより積極的に参照し、その知見を取り入れることで、研究の深みが一層増す可能性がある。

なお、審査では、日本の観光英語教育とインバウンド対応に関して、多角的な質問が寄せられた。観光業における受け入れ側の変化や、東アジア特有の英語変種の可能性、ELF や EIL の理論的枠組みと教育実践への応用、英語中心主義と多言語対応の是非、AI や ICT の活用、CLIL の実践状況、多様な英語への対応教材の有無などが議論された。また、本研究が観光分野に特化している中で、より普遍的な知見としてどのような示唆を持つかについても問われた。

口頭試問で指摘されたいずれの質問やコメントに対しても、渡辺 幸倫氏から真摯な回答がなされた。このことは、渡辺氏が長期にわたる調査や理論的な展開を追求する上で、本論文の限界性や今後の課題を意識しながら博士論文を取りまとめたことを示していると言える。

以上を踏まえて、審査委員会では本論文が博士学位論文に求められている水準を満たしていると判断し、博士（学術）学位の授与に値するものとして、本論文を合格とした。